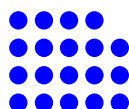


(仮説)AIと人間の最適な協働・共創・共生モデル

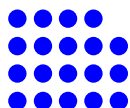
AIと人間の共生が拓く、次世代の知識創造スパイラル

～野中郁次郎氏のSECIモデルを再構築する「協働・共創・共生」の新パラダイム～

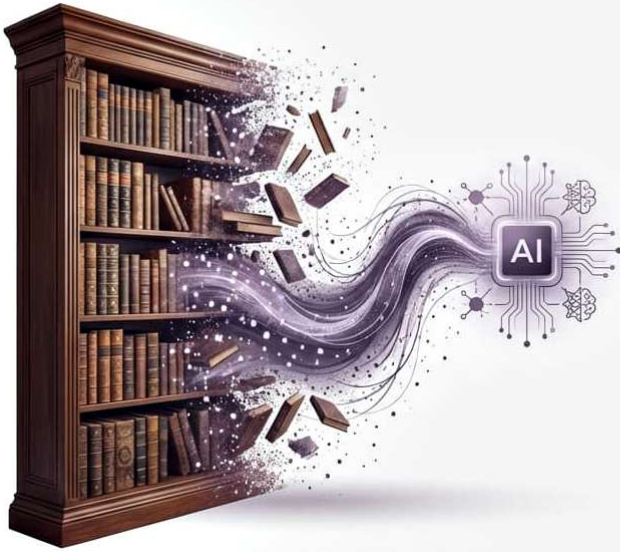
Ver.1.43



1. 競争優位の源泉が、根底から覆される時代
2. 原点回帰:知識創造の普遍的フレームワーク「SECIモデル」
3. AIと人間の共生を前提とした「次世代の知識創造モデル」
4. AFTER AI時代の競争優位は、「人間性」に回帰
5. まとめ(提言)



1. 競争優位の源泉が、根底から覆される時代



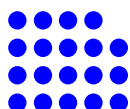
→ 大規模言語モデル(LLM)の汎用化により、高度な分析やコンテンツ生成はもはや特別なスキルではない。「情報の収集・整理・文章化」という従来の知的労働の価値は暴落した。

→ 一般的な経営課題に対するベストプラクティスやフレームワーク分析は、AIが一瞬で出力可能になった。誰もが80点のアウトプットを容易に出せる時代に、我々は何で価値を提供すべきか？

「情報の非対称性や単なる形式知の保有量は、もはや差別化要因とはなり得ない。」

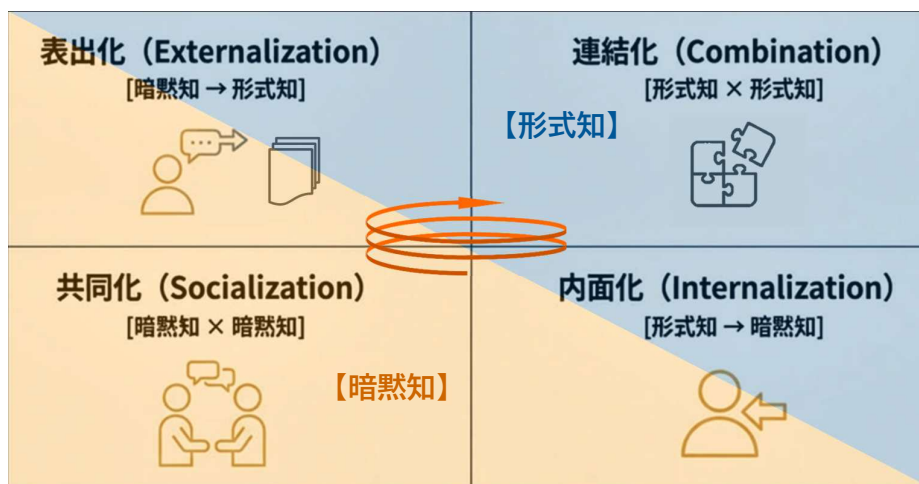
- 提起する問い ➡ 情報の提供ではなく「情報の意味付け」*1が求められる時代に、
我々、人間に残された独自の価値とは何か？

*1. AIによる情報収集・生成が容易になった現代では、単純な情報提供の価値は低下。情報を選別し、文脈を与え、具体的な行動や洞察に結びつける「意味付け」こそが求められる。



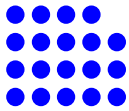
2. 原点回帰:知識創造の普遍的フレームワーク「SECIモデル」

- 経営学者 野中郁次郎氏らが、1995年に提唱した「**知識創造理論(SECIモデル)**」



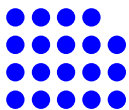
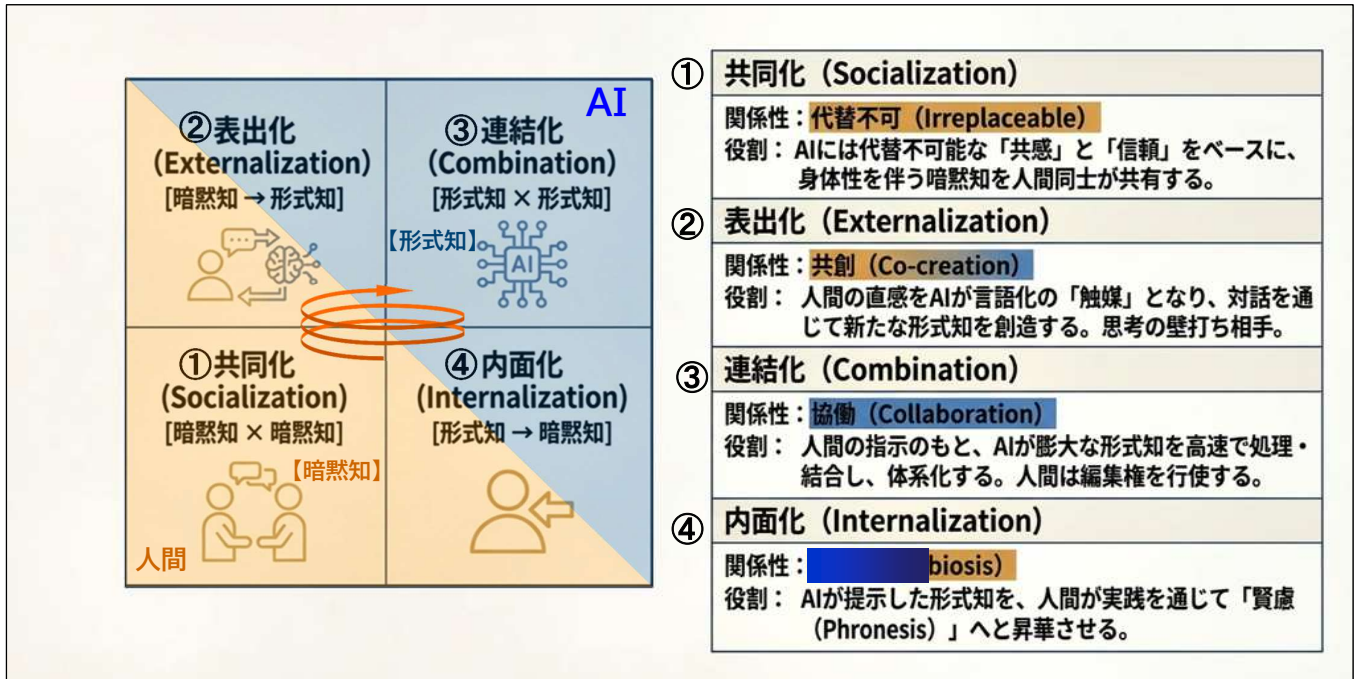
- **革新(イノベーション)**は、個人の行動や価値観に深く根差す【**暗黙知**】と、数値や文字で表せる【**形式知**】の相互作用で生まれる。**2つの知は相互に高め合わないといけない**。*2

*2. 出典: 日経新聞(2023年10月7日): 直言 Think with NIKKEIシリーズ: 野中郁次郎一橋大名誉教授「企業の失敗、野性喪失から「失敗の本質」の著者説く」



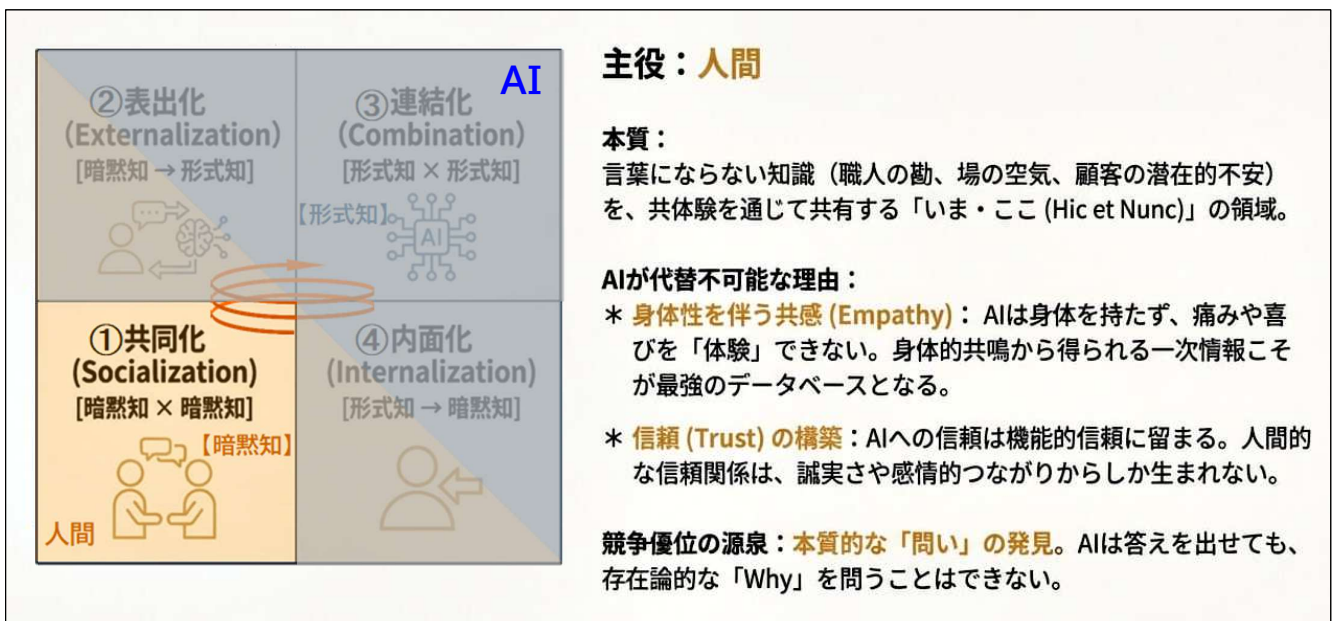
3. AIと人間の共生を前提とした「次世代の知識創造モデル」

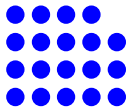
➤ SECIモデルは陳腐化したのではない。AIという触媒を得て、新たな次元へと「進化」する。



3. AIと人間の共生を前提とした「次世代の知識創造モデル」

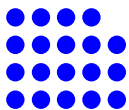
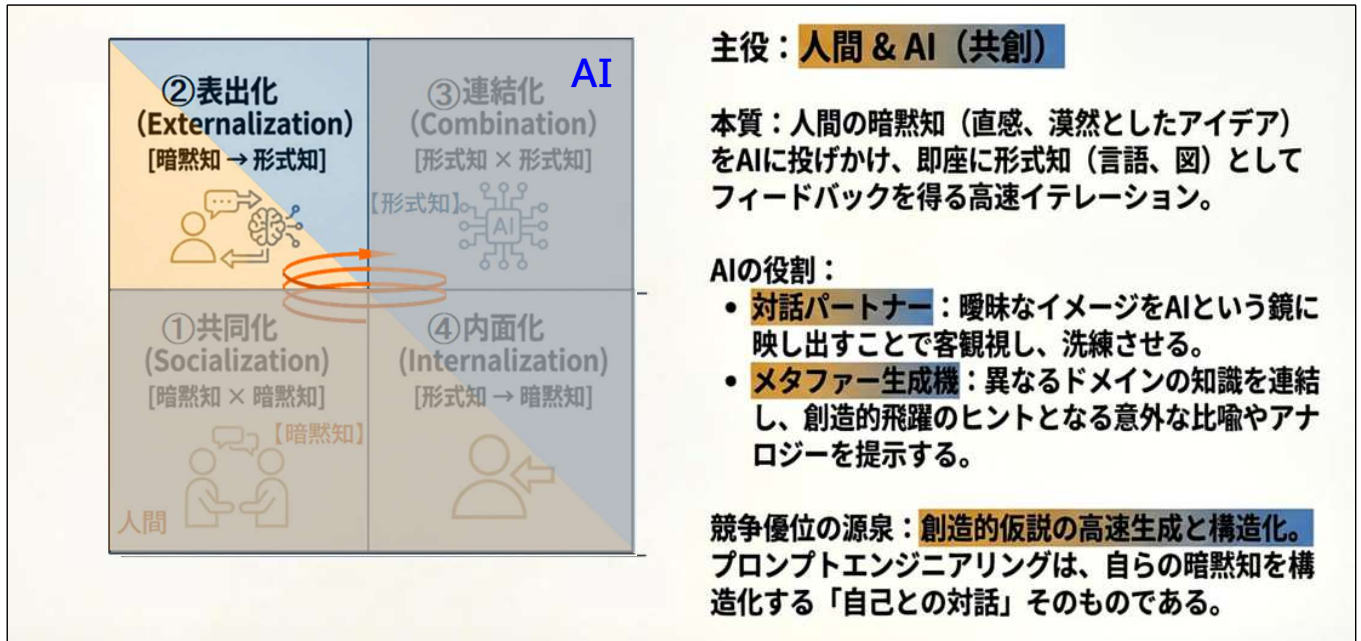
Phase1:共同化 「AIにはアクセスできない、人間性の聖域」





3. AIと人間の共生を前提とした「次世代の知識創造モデル」

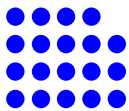
Phase2:表出化 「AIは、思考を飛躍させる「触媒」であり、「鏡」である」



3. AIと人間の共生を前提とした「次世代の知識創造モデル」

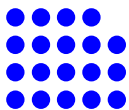
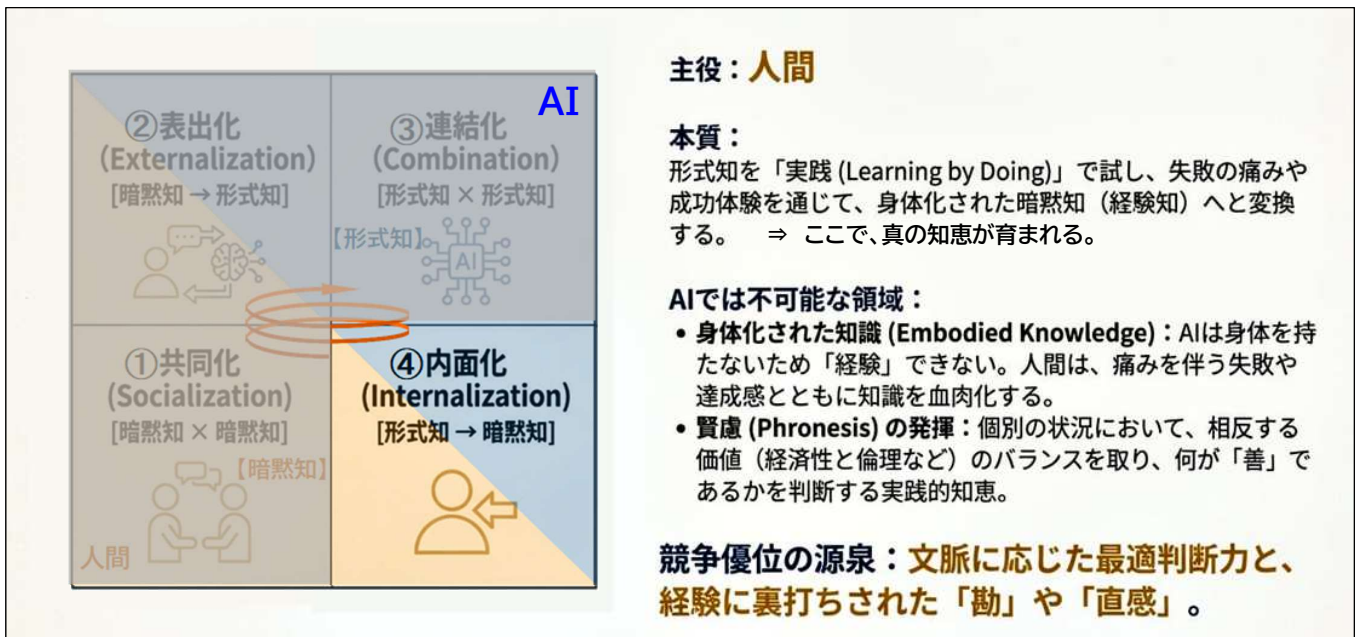
Phase3:連結化 「AIによる知のオーケストレーションと人間の「編集権」」





3. AIと人間の共生を前提とした「次世代の知識創造モデル」

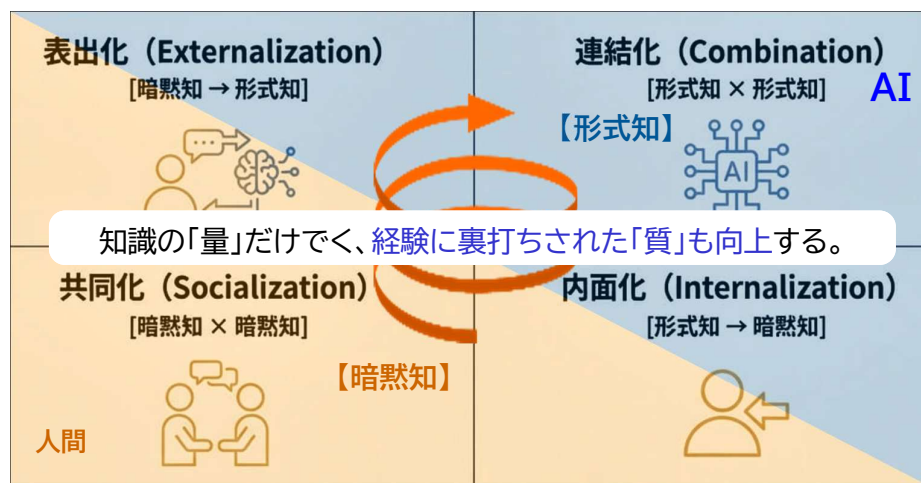
Phase4:内面化 「実践を通じて知を「賢慮(フロネシス)」へと昇華させる」



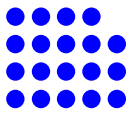
3. AIと人間の共生を前提とした「次世代の知識創造モデル」

AIが駆動する、より速く、より高次元への「知識創造スパイラル」

1. AIは、【形式知】ゾーンを劇的に高速化させるターボエンジンの役割を果たす。
2. これにより生まれた時間は、人間が最も価値を発揮する【暗黙知】ゾーンに再投資。



- ✓ AIは、「知識創造スパイラル」の【形式知】ゾーンの流れを加速させるが、【暗黙知】ゾーンは人間が握っている。人間不在の知識創造は、空虚な情報の空転に過ぎない。



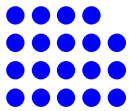
3. AIと人間の共生を前提とした「次世代の知識創造モデル」 Human-in-the-loop:新SECIモデルにおける役割分担

【暗黙知】

【形式知】

【暗黙知】

SECI フェーズ	主役	AIの役割	人間の役割（競争優位の源泉）
 共同化（S）	人間	支援不可（または限定的）	共感（Empathy）、信頼構築、身体的共鳴、潜在的課題の感知。
 表出化（E）	共創	触媒・壁打ち相手	構想力、メタファーの生成、プロンプトによる思考の構造化。
 連結化（C）	AI	実行主体（高速処理）	意味付け（Sense-making）、編集権の行使、倫理的判断、文脈適合。
 内面化（I）	人間	シミュレーター・コーチ	身体的実践（Embodiment）、賢慮（Phronesis）、経験知の蓄積。



4. AFTER AI時代の競争優位は、「人間性」に回帰

- AIが代替不可能な、新たな価値の源泉は、以下の3つに集約される。
- これらは全て、AIとの共生によってさらに研ぎ澄まされる。

1. 

共感（Empathy）に基づく信頼関係

身体的共鳴を通じて本質的な課題を発見し、人間同士の信頼を構築する力。

2. 

未来を構想し、本質を問う力（Conceptualization & Questioning）

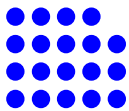
混沌から本質を掴み、AIには立てられない「Why」を問い、未来のビジョンを描く力。

3. 

身体を通じた実践知と賢慮（Embodied Knowledge & Phronesis）

実践と失敗から学び、文脈に応じた最善の判断を下す、身体化された知恵。

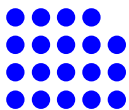
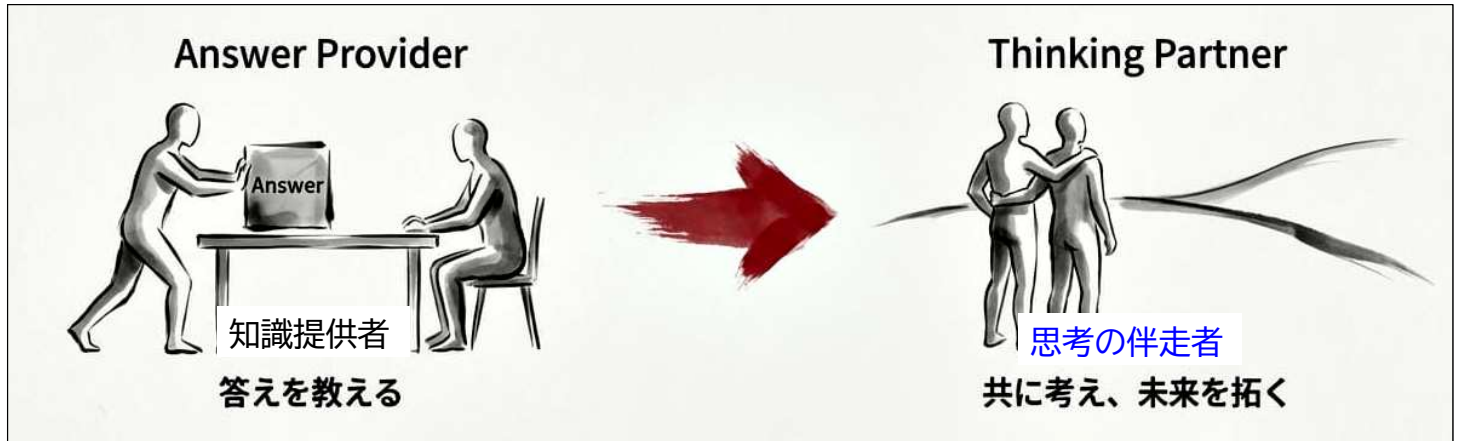
⇒ 「責任をとる」



4. AFTER AI時代の競争優位は、「人間性」に回帰

医療経営コンサルタントの役割の転換:「Answer Provider」から「Thinking Partner」へ

- クライアントに「答え」を教える「知識提供者 (Answer Provider)」から、共に問い、共に悩み、新たな知を創り出す「思考の伴走者 (Thinking Partner)」になる。
- 「答え」ではなく、「視座 (Perspective)」や「問い (Question)」を提供し、クライアントの自走を支援することが、真の価値となる。

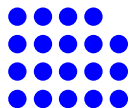


4. AFTER AI時代の競争優位は、「人間性」に回帰

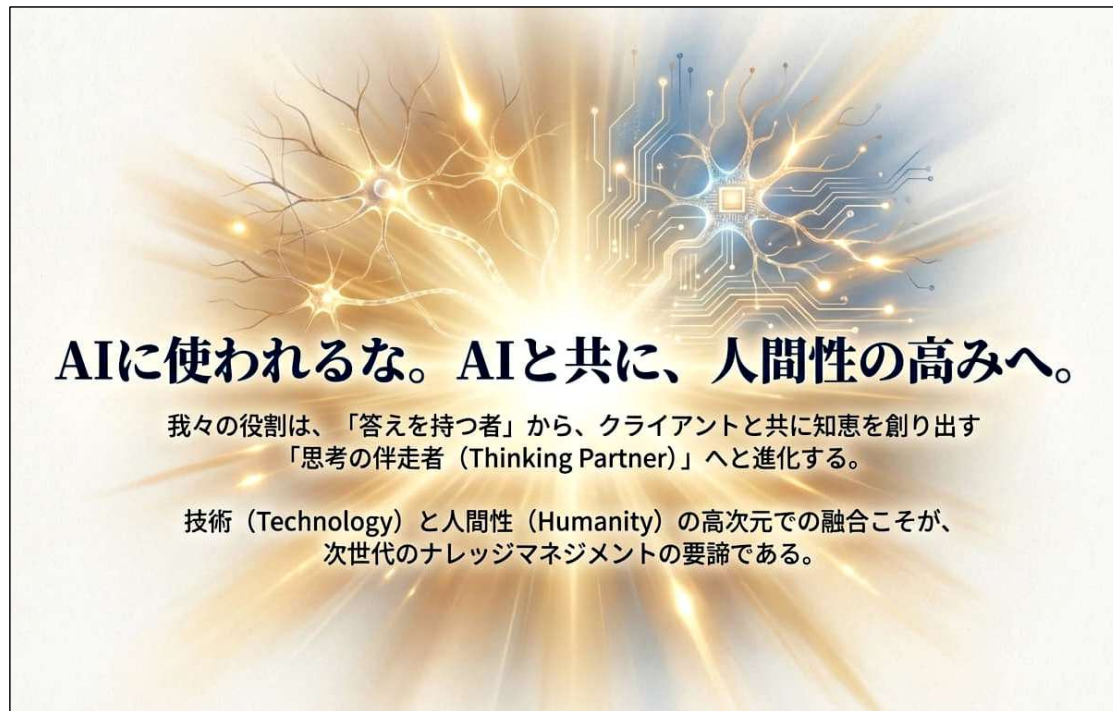
我々、医療経営コンサルタントが「今、すべき3つのこと」

思考の変革を、具体的な行動へ





5. まとめ(提言)



 Japan Association of Healthcare Management Consultants

14




公益社団法人

日本医業経営コンサルタント協会

Japan Association of Healthcare Management Consultants

大阪府(和歌山県連合)支部 理事 小川 敏治